≪実績報告書≫

令和４年度
「子どもと学ぶ男女共同参画における防災・減災講座および講演会」

開催日時：令和４年９月２４日（土）9：00～17：00
　　９月２５日（日）9：00～16：20
開催場所：御前崎市民会館、御前崎市研修センター２階大会議室
主催：特定非営利活動法人御前崎災害支援ネットワーク
後援：御前崎市、静岡県
協賛：㈱NTN 御前崎製作所、㈱木村鋳造所御前崎製作所、綜研化学㈱浜岡事業所、日本特殊塗料㈱静岡工場、エイケン工業㈱、㈱野川商店、㈱河原崎配管、タクミ建設㈱、（福）賛育会東海清風園、（福）御前崎厚生会灯光園、（司）つなぐ、広和工業㈲、遊輪ショップふくだ、福代工務店、個人会員
参加人数：１日目６４人　　２日目７８人
（台風１５号による市内外で被害が発生したため予定人数の約半分に減少した）

毎年開催してきた本研修会ですが、今回から次世代の防災を担う子供たちもスタッフの一員として積極的に参画してもらうこととしました。具体的には受付や講師の紹介などを担当してもらい、3 年ぶりに集合形式で研修を開催しました。

今回も多彩な講師陣により多様なテーマでの防災講座を開催することができました。また静岡県で起こっているタイムリーなテーマについても講演いただき、その背景や静岡県のスタンスなど深く知ることができました。

なお今回は前日に台風 15 号の接近による被害が県内外各所で発生したため、交通障害により一部の講師は来場できずに急遽オンラインでの講演となったり、参加を予定していた受講者が来られなくなるなどの不測の事態となりましたが、無事に 2 日間開催することができました。

また新型コロナ感染対策として参加者の手指消毒と不織布マスクの着用、会場は常に換気を行いました。そして更に、後日万が一感染者が確認された場合も濃厚接触の状況が追跡できるように、参加者全員から感染状況カードを提出してもらうなどの対応を取りました。

報告は受講者の感想や意見等の一部を追加し報告書とさせていただきます。

【１日目】
≪防災講演会≫
①「命の犠牲の上に成り立つ教訓はあってはならない」
石巻市日和山幼稚園遺族有志の会　佐藤美香氏

講師は東日本大震災が発生した日に石巻市日和山幼稚園に通っていた佐藤愛梨ちゃんの母親です。今回はオンラインで講義を行っていただきました。

日和山幼稚園は標高 56 メートルの高台に位置しているため、地震発生後もそのま

ま幼稚園に待機していれば津波に遭うことはありませんでした。しかし当日は地震が発生した後、防災無線が鳴り響く中 15 時頃に送迎バスに乗り込み子供たちは幼稚園を出発しました。バスは途中で津波に遭い動けなくなり、運転手は子供たちをバスに残したままにして園に戻ったため、その後発生した大規模火災にバスは巻き込まれてしまい愛梨ちゃんたちは亡くなってしまいました。

また送迎バスの運行は3便に分けて行うと園からは事前に家族に説明されていましたが、当日の園児の利用状況によっては2便に変更するなど、家族には説明のないままに変更して行われていたことが後になって分かりました。

被災することで得る教訓はたくさんあり、それは必ず今後に活かさなければなりませんが、命の上に成り立つ教訓は絶対にあってはならないと佐藤さんは切実に訴えます。「行ってきます」と言ったきり、未だに愛梨ちゃんの「ただいま」の声が聞けない切なさが伝わってきました。そして講師の「今日一日を大切に」という言葉は深く胸に残る言葉になりました。

②「ここに生きる」　社会福祉法人大槌福祉会おつちこども園園長　八木澤弓美子氏

東日本大震災が発生した際に園児を連れて最初に避難した場所は、園より高台にある国道沿いのコンビニでした。しかし周囲の状況から「ここでは危険」と思い、道路の反対側にある急斜面の山を園児たちを抱えながら必死に上りました。そこに避難した園児たちは命拾いをしたのですが、保護者とともに帰っていった９人の園児たちは亡くなってしまいました。

被災後のボランティアなどの支援や、悲しみを抱えながらの仮設園舎で保育園の運営などを通して、静岡県とのつながりが始まりました。そして亡くなった園児たちのことを口にしない先生や子供たちの思いを残すために、静岡市の「うみねこの会」が「あの日」というタイトルの絵本を作成しています。

仮設園舎から本園舎を建てる際にも葛藤や課題がありました。同じ場所に建てることに対しては、また同じ津波被害に遭わないだろうかという葛藤がありました。これに関しては先生たちと話し合いを続け、正解はないかもしれないけれど避難訓練の見直しと実践を繰り返すこと

で心の整理をつけました。

国の補助金を使っての建て替えは「現状復旧」が原則にあります。同じ形で同じ素材を使うなどという制約は、被災を繰り返すのではないかという不安が付きまといます。それに関しても交渉をしながら建て替えをすることができました。

11 年前に保育園に通っていた子供たちと会う機会を設け、その当時の思いや今の思いを知ることができました。このことは自分を含めた先生方にとってこれまでの胸のつかえが少し取れたような、とても良い機会となりました。そして多くの方々に支えられていることに感謝しながら、こども園という形に変化した園の運営に頑張っていきたいと考えています。

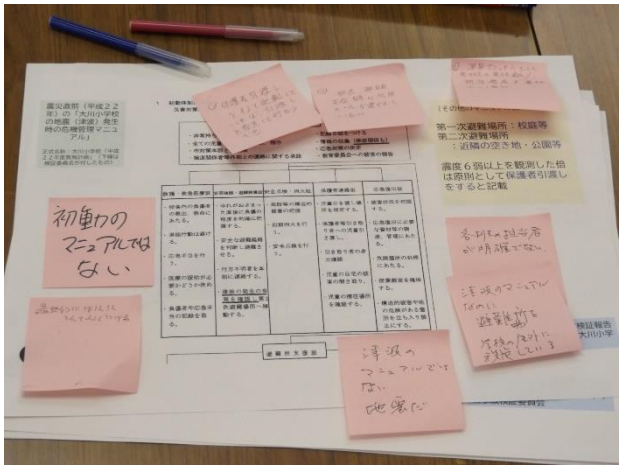
≪防災講座≫

「学校防災マニュアルを考える」　　弁護士・防災士　永野海氏

防災マニュアルはいろいろな事業所で作成されていると思われます。東日本大震災で被災し多くの犠牲者を出してしまった宮城県石巻市立大川小学校にも防災マニュアルは存在していました。

大川小学校の国家賠償訴訟による仙台地方裁判所の結論では、『教員が現場でとっさの判断を間違えたことによる学校側の過失』と判断しています。しかし控訴審である仙台高等裁判所は、その時の教員たちの対応ではなく『事前防災を怠っていたことが学校側の過失』であると指摘し、この判断は上告審である最高裁判所でも全員一致で支持されました。

大川小学校の危機管理マニュアルでは、地震発生後は一時避難場所である校庭に避難することになっており、当時も児童や先生は速やかにその行動はとることができていました。しかし津波が来ると予想されている状況の中、先生たちは次の避難場所に移動するかどうかの議論を行い、次の行動に移ることがなかなかできず多くの犠牲者をだしてしまいました。マニュアルには第二次避難場所として、「近隣の空き地や公園等」という形式的で抽象的な文言でのみ記載されていました。　　自分の判断で避難行動ができない児童を含む学校での防災マニュアルは作成しただけでは意味がありません。マニュアルを作成するうえで重要なのは「Ｓ」＝「絞る」という視点。その地域でどんなハザードが想定されるのかといったハザードを絞ること。誰を守るのか対象を絞ること。そして長々とではなく、抽象的ではなく、避難行動や避難場所など具体的な内容を記載するという書く内容を絞る、



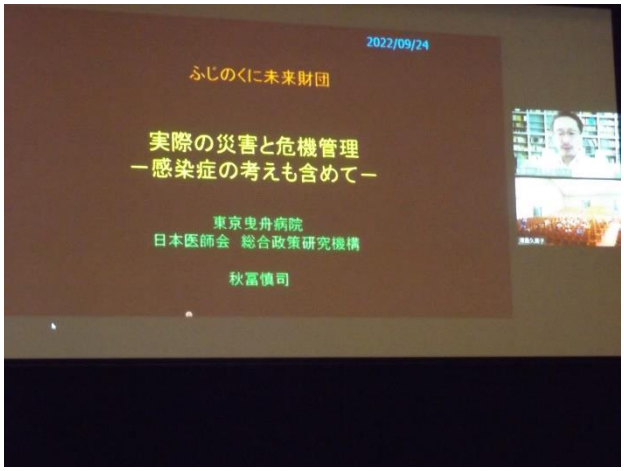
という視点が重要になってきます。
そしてもう一つ重要なのが「Ｋ」＝「訓練の継続」です。マニュアルに記載された行動を実際に何回も行うことで、避難行動や避難経路を身につけることができ、更に検証することでより有効なマニュアルにブラッシュアップされます。
これらを踏まえた上で大川小学校の地震発生時の危機管理マニュアル及び地震を想定した避難訓練の経路図（学校敷地内）をみて、その問題点を付箋に書きだしながらグループワークを行いました。
　なお防災マニュアルを考える際には３つのＳの視点も大事です。
　一つ目のＳは「ＳＷＩＴＣＨ（スイッチ）」。火災や地震などといった非日常が突然発生した際に、日常の生活からスイッチを切り替えるための情報（どんな状況になったらスイッチを切り替えるのか）を記入しておけば良いのか、日頃から考えてそれを文字にして落とし込んでおく必要があります。
　二つ目のＳは「ＳＡＦＥ（セーフ）」。どこを通ってどこに行くのかといった、安全な場所に安全なルートで行くことを具体的に記載しておくことが必要です。
　三つ目のＳは「ＳＡＶＥ（セーブ）」。避難した後に最後まで命を守りぬくための具体的な情報を記載しておくことが大事です。

さいあくの想定でも
しなない方法を
すくない文字で
せだいが変わっても
その時動けるものに
Ⓢ＝絞って作って　　Ⓚ＝訓練継続
　まとめとして、学校防災マニュアルはこの視点で考えることが命を守ることに繋がります。

「実際の災害と危機管理～感染症の考えも含めて～」

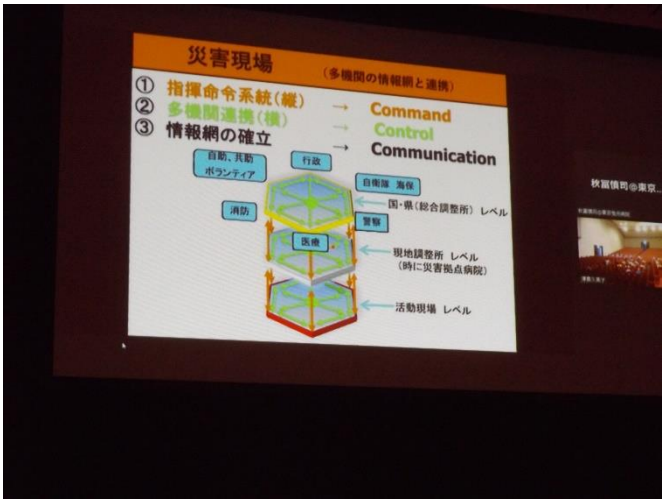
東京曳舟病院副院長・救急外科医師　秋富慎司氏

　講師は交通事情により急遽オンラインでの講義となりました。
　今回は災害現場におけるＤＭＡＴ等の活動を通して、救助活動の際の危機管理について学ぶ機会となりました。



　　阪神淡路大震災では発災から約３時間の間に死亡者全体の 81%が亡くなったと分析されています。そして 3～24 時間以内の死亡者は 13%で、この時間帯は防ぎ得る死と分析されています。この数字は地域住民等の救助活動でその割合は変わってくるため、大変重要な時間帯となってきます。　　災害現場では情報を制することが大変重要です。情報は多岐にわたっているため、情報を収集しそれを集約するとともに分析し、マネジメントしていくことが求められます。更にそれらを報告することで次にフィードバック

していかなければなりません。



大規模な災害現場ではいろんな立場の人が救助活動に参加することになります。そのためには同一組織内の指揮命令系統の確立に加え、横のつながりと指揮命令系統を確立する多機関連携の構築が重要です。現場に集まる多くの関係者・組織の情報網の統制は被害を如何に少なくさせるかに関わってきます。

また災害現場では救助者自身の安全確保が第一です。そしてその場にいるスタッフの安全確保も怠ってはなりません。自分やスタッフの安全が護られなければ傷病者の安全は守れないことを常に認識しておくことが大事です。そして冷静な思考を保つことも重要です。想定しないようなことが発生している、または発生する中で、スタッフは混乱しないようにすること。言い換えれば自分たちが混乱してしまうとすべての人の安全を確保できず、結局すべてを守れなくなってしまうことを肝に銘じておかなければなりません。

私たちはいつ被災者になるとも限りません。被災者となった際にも支援者であり続けたいという気持ちを忘れてはなりません。自助：共助：公助は７：２：１と言われています。地域住民である私たちは自分たちでも救助活動ができると思う必要があります。そして行政に何かをしてもらうのを待つのではなく、自分たちで何ができるのかを考えなければなりません。その上で自分たちでできると自覚し地域防災・防犯計画を立てる必要があります。

【２日目】

≪防災講演会≫

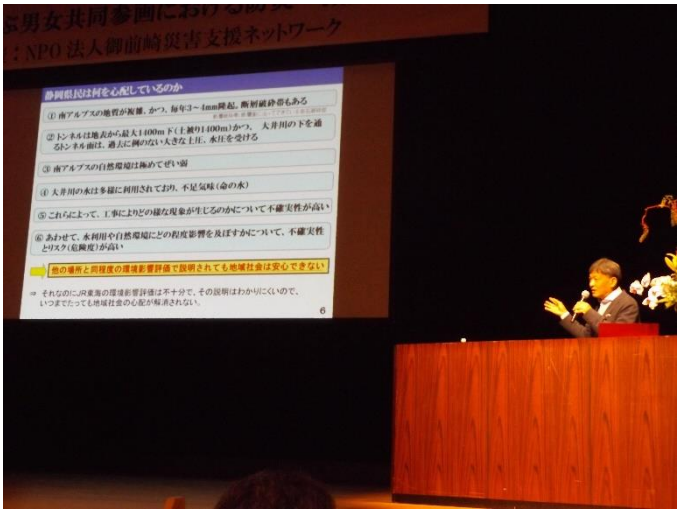
「リニア中央新幹線静岡工区の問題の本質」　　静岡県理事　難波喬司氏

今回はＪＲ東海が整備を進めているリニア中央新幹線に対して、静岡県のスタンスを理解する良い機会となりました。

まず静岡県はリニア中央新幹線整備事業の必要性には賛同しています。その上で南

アルプスという特殊なエリアの生態系の維持と大井川の水利用の特殊性を考慮し、県民が安心できるレベルで事業を実施していくことをＪＲ東海に求めています。　リニア新幹線のトンネルとなる南アルプスの地形に関する特殊性として、地質が大変複雑で毎年 3～4 ㎜隆起していることに加え、断層破砕帯であるという点です。更にトンネルは地表から 1400ｍ下、尚且つ大井川の下を通る計画で、過去に例のない大きな土圧・水圧を受けるという点で

す。



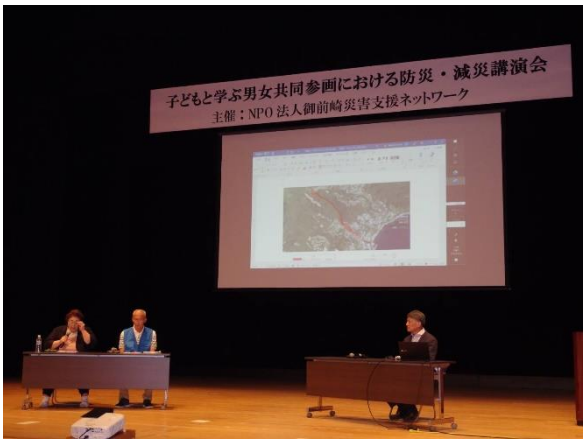
このような場所にトンネルを掘った場合に懸念されるのが大井川の水の減少で、それにより脆弱な南アルプスの自然環境が大きく変わってしまうことと、多様に利用されている大井川流域の住民や企業の命の水の枯渇が心配されています。

このような状況をふまえて静岡県はＪＲ東海に対して、トンネル工事の湧水の全量を大井川に戻すよう求めてきましたが、「トンネル掘削による河川流量の減少量は特定できるので全量戻しは必要ない」というＪＲ東海の見解の違いにより、基本認識が大きく違うことから 2014 年から 2018 年の間は対話が始められませんでした。そして 2018 年 10 月にＪＲ東海がトンネル湧水の全量を大井川に戻すことを表明したため対話が始められました。

しかしＪＲ東海は静岡県の要求があまりにも高いという認識の為、県が求める追加の調査や解析データの開示が十分に行われず、対話の進捗が遅いというのが現状です。そこで 2020 年 4 月に国土交通省が静岡県とＪＲ東海との対話促進のために有識者会議を設置し議論を進めています。そこでまとめられた中間報告を基に、現在は国土交通省による環境保全有識者会議で生物の多様性や環境への影響に関する議論を行っています。その主な論点は、①中下流域の地下水への影響、②工事中のトンネル湧水の県外流出、③発生土の処理、④地下水位低下に伴う生態系への影響、の 4 点ですが、いずれも静岡県とＪＲ東海との見解に違いがあるのが現状です。

静岡県とＪＲ東海とのいわゆる「リニア問題」はなぜこのように時間がかかってしまうのかを考えると、コミュニケーションの手法によることが要因として考えられます。受け手の認識を特定の方向に変化させ、それによって相手の意見を変化させる「説得型コミュニケーション」では、双方の溝はなかなか埋めることはできません。

それに対して「対話型（双方向）コミュニケーション」は、異なる価値観の存在を認め（同調はしないものの）、相手の価値観・認識・論理と自分の価値観・認識・論理との違いを明らかにすることで、相手との合意形成を目指します。



また住民が感じる影響の大きさと、事業者が認識している影響の大きさには、当初は大きな乖離があります。それはリスクをどのように認識するのかによって変わってきます。自分が選択した行動ではないのに受けてしまう「受動リスク」は、無意識にリスクを大きく見積もりがちになり、受忍限度（リスクがこのレベルでないと受け入れられない）は低くなります。　半面、自分が選択した行動によって受ける「能動リスク」は、無意識にリスクを小さく見積もりがちになり、受忍限度は受動リスクに比べて高くなります。このように人の考え方やあることへの評価は受動か能動

かで影響を受けます。ＪＲ東海は様々な環境への影響を小さく認識していたことが現在の「リニア問題」になっているのではないかと思われます。
リスクを前提としたコミュニケーションは最後まで認識の差は残ります。しかしそれを双方の気づきと信頼、代替え措置や互譲などによってどのように埋めていくかが重要になってきます。
講演の後、難波さんと落合代表・山本副代表によるパネルディスカッションを行い、会場参加者からの質疑応答を行いました。

≪防災講座≫
「ボードゲームで学ぶ性知識講座」
一般社団法人ソウレッジ　一柳宙氏、石井李歌氏

妊娠リスクのある行為の後、72 時間以内に飲む「緊急避妊薬」というのがあります。早く飲めばそれだけ避妊効果が高いと言われています。災害が発生し避難所生活を余儀なくされる中、性被害に遭うという報告がしばしば聞かれています。また別の報告では 2.5 人に 1 人の女子と 10 人に 1 人の男子が、18 歳までに 1 度以上何らかの性被害を受けているという報告もあります。更に性犯罪被害者の 8 割以上が被害届を出していないという実態があります。
　このような状況において緊急避妊薬は有効と考えられますが、親や知り合いにばれてしまうとかお金がないなどという理由で、緊急避妊薬の使用のハードルが高いという実態もあります。そのような現状を鑑み、ソウレッジでは情報発信や緊急避妊薬の無償提供等を行っています。
　その後グループごとにボードゲームを行いました。ゲームには自分の誕生から成人になるまでの間に、性に関する出来事や相談事などがそれぞれのマス目に書いてあり、自分が止まったところのマス目の内容についてグループで話し合うというものです。このゲームの目的は、大切な話を子供とするための話す言葉を持つことと、明日から身近な人の為に何ができるかを考えることです。各グループでは話が盛り上がり、またいろいろな意見の共有ができ、多分今までこのような内容の話をしてこなかったことから大変有意義な時間となったようです。

「男女が共に支えあう地域防災の未来」　　静岡大学教育学部教授　池田恵子氏

　自主防災組織とは、自分たちの地域は自分たちで守るという自覚と連帯感に基づき自主的に結成する組織のことです。自主防災会が自治会や町内会と同一組織であると

いう地域が 95%という点を見ると、地域組織を基盤としているという点では身近な存在だといえます。しかし会長が 60 歳以上というところが 85%、女性の役員が不在だという組織は 56%という数字になっています。

2021 年 4 月における都道府県別の自治会長に占める女性の割合は全国平均で 6.3%です。静岡県は 2.０%という数字で、女性の自治会長が一人もいないという市町は３５市町の内１５市町となり、人数では２．４%が実態です。

また防災訓練の内容をみると消火・避難・応急救護・炊き出しといった内容が多く、炊き出しは女性の担当というように性別で役割分担しているのも特徴です。また防災訓練に避難所運営訓練を組み入れているのは少数にとどまっています。

しかしその反面、各地の女性防災講座の開催や女性グループによる地域防災活動の報告は着実に増加しています。この矛盾はどこに要因があるのでしょうか。

2021 年に「女性も担う静岡の地域防災（民間団体）」が行った災害発生に備える女性の意識・実態調査から、自主防災組織への女性の参画の在り方が見えてきます。
まず自治会長が自主防災会の会長を兼務しないほうが良いという意見が約 60%ありました。その理由として、防災会長が防災・災害対策に専念したほうが良いとか、分担したほうが取り組みやすいという意見があります。更には役員はほとんどが１年で交代してしまうため発展的ではないという意見も出ています。

また女性の割合が大変低いために一人では意見が通りにくいとか活動しにくいという意見や、相談しあう女性の仲間が必要、男性が女性のニーズを理解するのは難しい、などという意見が出されています。対応策としては規約等で女性の役員数や割合を決めておくということも有効です。具体的には自主防災会の副会長や副班長の１名は女性とするなどと決めておくことで、意図的に女性の参画を促すことに繋がっていきます。

「防災先進県静岡を目指して～南海トラフ地震までに目途をつけておきたい課題～」

常葉大学社会環境学部准教授　小村隆史氏

東日本大震災後に建立された釜石市防災市民憲章が画面に映し出されました。そこには「災害はときと場所を選ばない。避難訓練が命を守る。何度でもひとりでも、安全な場所にいちはやく、その勇気はほかの命も救う。（略）」と刻んでありました。あの大震災の教訓として具体化すべきことは「避難の大切さ」で本当に良いのでしょうか？　避難できない人がいる医療機関や福祉施設などのことは考えなくても良いのでしょうか？　このような問いかけから講義は始まりました。

私たちが防災を学ぶ意味を考えると、①自分と家族が被災者にならないこと。

②自分と家族が無事だったならばよき支援者になること。③不幸にして被災者になったとしても賢い被災者になること。この３点がキーワードとして挙げられます。そしてそれを一言でまとめると「予防に勝る防災なし、災害対応に防災の本質なし」と言い換えることができます。

近い将来発生すると言われている南海トラフ地震の基本知識について、いろいろな視点から確認しました。最初に南海トラフ地震の想定震度分布と、阪神淡路大震災の震度分布を受講者それぞれが自分のスマホで調べました。そして南海トラフ地震では震度６強と震度６弱の境界と、震度６弱と震度５強の境界という２本の線を、個人ワークとして日本の白地図上に引く作業を行いました。次に阪神淡路大震災の震度６と震度５の境界を同じ地図に引く作業を行いました。この作業で分かったことは、阪神淡路大震災に比べて南海トラフ地震では大きな揺れの範囲が非常に広範囲に及ぶということです。

次にそれを基に、震度６強以上の揺れに見舞われると想定された都道府県の人口を見積もる作業を行いました。この数字の合計が受援側の総数となり、震度６弱の地域も被災側として支援側に回れないことを含むと、日本の総人口を念頭に置いて受援側・被災側と支援側（震度５強以下の都道府県）の人口比率はどのようになるか。更に静岡県の人口を念頭に置いた場合、支援勢力の何割を静岡に割いてもらえるか考えると、外部からの支援にほとんど期待できない状況が予想されます。

また支援側のプロといえる自衛隊（陸・海・空）総数が約 22 万４千人、消防職員総数が約 16 万６千人、警察官総数が約 29 万６千人、海上保安官の総数が約１万４千人という状況です。先と同様にこのうちの何割を被災地に派遣できるのか考えると、当然全員の派遣などできないため、受援側・被災側の人口に対して派遣される人数の割合は大変少なくなります。

このような状況に加えて日本の人口減少、ライフラインの老朽化、国や自治体の財政悪化なども考慮すると、被害の規模と復旧までの時間は非常に大きくなることが予測することができます。

これらを踏まえると、事後対応の防災から予防防災へとしっかりとシフトチェンジしておかなければなりません。何かあったら避難所に世話になるという思考から避難所に行かなくても済むような状況（対策）を作っておくこと。停電の対策とし自家発電機を備えるという対応から、太陽光発電＋大型蓄電＋ＰＨＥＶという暮らし方。何かあったら自衛隊に頼むという対応から、　なるべ　く自衛隊に世話にならずに済むような状況を作っておく。このような思考を持つ必要があります。南海トラフ地震が発生した場合、静岡県にどれ

だけの支援が来るのか（来られるのか）という期待は高く持てない現状がわかってきました。このことから、「予防に勝る防災なし、災害対策に防災の本質なし」という考えで日常から対応をしておくことが必要です。

【受講者の感想や意見】（抜粋）

＜佐藤美香氏＞

・当たり前の日常を大事にすることを、もっと大人が子供に伝えていかなくてはいけないなと思いました。
・絞り出すように出される言葉から悲しみの深さが伝わってきました。命を守る行動というのはこうしたお話を聴いたり訓練に参加したりして身につけていきたいと思います。
・（略）大人の指示に従うしかない子供たちを守る、大人がしっかりした知識と危機感を持つことの大切さを感じました。
・私も子供の命を預かる立場のある者の一人として、（略）「子どもの命を中心に置いた教育を」という言葉が大変心に響きました。

＜八木澤弓美子氏＞

・前に進んで頑張ってください。後ろを振り返らないでください。愛情を知っている子供たちがいることは素晴らしいですね。
・皆が大切に思って行動しても間違いは起こる。未来は見ることはできないが、分からない未来に備えることはできるのではないかと感じた。
・正解のない訓練の繰り返し、「それでも親に引き渡さないという決定」（略）命の尊さ、大切さを身にしみました。
・（略）子供の命を絶対守るということを自分なりにもう一度考え直していきたいと思った。保護者の元へ帰すから安全と思っていた。保護者の命も考えた行動をとりたい。
・（略）行政（教育委員会）、教育現場と防災をつなげることが今の私の目標ですが、八木澤先生のお話を聴いてより強くこの目標を達成しようと思いました。

＜永野海氏＞

・（略）教育現場と防災をつなげたいと思っている身として一番関心を持っていた講義でした。学校の防災マニュアルを実際に見たことはなかったので、東日本大震災の実例を見ながら一つ一つ問題を考えることは大変難しかったですが、すごく勉強になりました。（略）

・（略）以前勤めていた認知症高齢者グループホームでは「備え」を中心に準備していました。自分たちの生活の中で防災に取組むことで足りていないことは何か、少しずつ考えるようになりました。「さしすせそ」参考になりました。
・女性消防隊で防災ハンドブックを作成しようと考えていたところなのでとても参考になりました。
・学校のマニュアルが誰が見ても理解でき、日々の訓練を重ね有事の時に発揮できるようにしなければならないことを痛感しました。自校のマニュアルを見直してみます。
・（略）Ｓ（絞って作成すること）を認識した今、訓練を行い実践の場で使用できるものを常に改善して作ることを学んだ。

＜秋富慎司氏＞
・過去の災害や事故からの経験からＤＭＡＴの重要性が広く知られるようになり、本当に良かったと思いました。
・（略）情報を制することが災害を制するというお話をしていただきましたが、災害時は無線なども使えなくなっている可能性があり、必ずしも情報をうまく収集できるわけではないんだということを改めて気づかされました。
・（略）「声なき声を拾う」「情報がないということが情報、情報を拾いに行く」私の仕事に活かすべき言葉です。
・（略）要救助者がいる前でネガティブ発言をしないことも覚えておきたいです。

＜難波喬司氏＞
・（略）何を課題として対話しているのか具体的に理解できた。受動リスクと能動リスク、対話、腹落ち、こころとまなざし、腹落ちしました。
・対話に対するお話、リスクコミュニケーションがとても興味深かった。お互いを「こういう人」とラベリングしてみることの危うさ、常に物事について話し合う際に心する必要があると感じました。
・（略）今まで水のことが不安で、何をどう知ればよいのか分からなかったので、本日来て本当に良かったです。自分なりにしっかり情報を得て考えていきたいです。
・（略）もしトンネルを掘ったとして、その土をどちらへ持って行くのかを県民に分かりやすく説明していただけるような体制を構築して欲しい。
・今まで報道で認識していた内容と大きく違っていて、正しい情報を理解することができてよかったと考えます。
・（略）ＪＲ東海との対話についてどのようにすれば話し合いになるのかということもうかがいとても興味深かったです。今後よい対話が成立するといいなと思います。

＜ソウレッジ　一柳宙氏・石井李歌氏＞
・ゲームでありながらかなり考えさせられて難しい。（略）家庭での話し合いや学校での教育も大切になると思う。

・処方箋なく緊急避妊薬がどこでも買えるように法改正活動を望みます。
・（略）世の中の意識も大きく変容し、防災と性被害のかかわりについて本日改めて提起され衝撃を受けました。
・講演という受動的な内容が多い中で、自分たちで考えてゲームを進めるのは新鮮であった。
・ＪＫビジネス、アウティングなどの言葉を知りました。親も子供も学習しなければならないと思いました。大切なことだと思います。
・新しい体験ができてよかったです。なかなか口にし難い話題も、今回の形にすると話題にしやすくなる。きっかけづくりに良いと思います。

＜池田恵子氏＞
・自主防災組織における女性の視点の必要性を改めて感じました。
・防災組織に女性が加わることにはなかなか実現しないむなしさは常々強く思っていて、時代の流れも良い方に感じました。先生の言葉一つ一つ応援されているのだと嬉しい印象でした。
・男性参加者の意見をグループワークで聞けたのも良かったです。
・研修を受けて地域でも女性参画と言っているがマッチングがうまくいかない。自治会や町内会の役員の意識改革、女性も声を挙げなくてはいけないと思った。
・女性防災委員を作らなければなりません。
・役員を経験したことがある女性たちの意見はとても勉強になりました。

＜小村隆史氏＞
・地図を記入し数字を考えてみると発見がありました。ボランティアも入りにくい静岡に住んでいることに驚きました。
・目からうろこです。防災を学ぶ意味は？「予防に勝る防災なし」、納得です。
・これまでの自分の考えが甘かったことにショックを感じた。「避難することが防災ではなく、避難しなくても済む防災対策を」、これ覚えて帰ります。
・スマホを使っての南海トラフ良かったと思います。助けてもらえる県が少ししかない大きな地震です。よく考えてみなければなりません。

＜防災や減災において男女共同参画を進めるために何が必要だと思うか＞
・「村」社会からの脱却。
・中間支援組織の必要性を感じた。
・まずはお互いが思っていることや感じていることを確認しあうことが必要だと思います。また男女だけでなく、性の多様性への配慮も必要かと思います。
・防災等に関わらず男女共同参画は気軽にできる、誰でも自分事だと考えることは必要だと伝える。

＜全体を通しての感想や意見など＞

・小中学生の講師紹介とても良かったです。子ども達と一緒に学ぶ時間もあると良いと思いました。
・日程、タイムスケジュール、会場を受付で配布していただけると助かります。
・同じ組織同士では出ないであろう考え方を知ることができてよかった。
・前日の天候により来場できなくなった講師に対しての急遽の対応、判断がすごく良かったと思う。
・非常に豪華な講師の方々でみんなもっと受けて欲しいと思いました。来年は周りを誘います。
・リスク研究学第一人者の前田恭伸（やすのぶ）教授（静岡大学工学部）を呼んでください。
・危機感がない生活を反省するばかり。刺激されること多いです。

以上

受付

ご来賓
受付

公益財団法人
ふじのくに未来財団
Fujinokuni Future Foundation

「静岡トヨタ自動車ハイブリット基金助成事業」

「真如苑市民防災・減災助成金事業」

の助成を受けで開催しました。

特定非営利活動法人
御前崎災害支援ネットワーク

≪事務局≫
〒437-1612　静岡県御前崎市池新田５４０８－１
TEL／FAX　０５３７－８６－２０５３
E-MAIL　omaezaki-dsnet@shore.ocn.ne.jp
URL　https://omaezaki-dsn.net/